

2016.12.10 (土) 14:00~15:30

於：大田文化の森 第3・4集会室

記念館講座～龍子・熊谷恒子・山王草堂・尾崎士郎記念館の学芸員による講演～（通算 7 回目）

平成 28 年度第 1 回「川端龍子／春の青龍展の魅力」

大田区立龍子記念館 学芸員 木村 拓也

■川端龍子と青龍社の歩み

1885 (M18) 年 6月6日、和歌山市に生まれる（本名：昇太郎）

1908 (M41) 年 洋画家を目指しながら、『少女の友』などで挿絵を描いて生計を立てる

1913 (T2) 年 渡米、帰国後に日本画家に転向

1915 (T4) 年 30歳の時、再興第2回日本美術院展に入選。その後、院展の花形として活躍

1929 (S4) 年 院展脱退の翌年、自らの美術団体青龍社を設立

1963 (S38) 年 文化勲章受章と喜寿を記念し、龍子記念館を設立

1966 (S41) 年 4月10日 80歳で逝去。青龍社も龍子の死とともに解散する。



本日は、春の青龍展の第1回（1933年）～第33回（1965年）までを取り上げます。

1. 「春の青龍展」とは？

■春の青龍展の概要

秋に開催される青龍の本展とは別に、春に開催された試作展。

1933年から1966年まで毎年開催。龍子は亡くなる前年の第33回展（1965年）まで出品。

開催の契機としては、「本社所属の若い諸子は、年一度の秋の展覧会だけでは物足りんと云ひます。」

「青龍社試作展覧会予告」『第四回展覧会目録』（1932年）

試作展といえど、龍子のみなぎる想像力が、第一回出品目録の龍子書いた詩にも表されている

「戦線異状あり 日本画壇 既に拠点占む 青龍の師 TA TTA TTA TA TA TA TTA TA。」

「青龍陣」『春の青龍社第壹回展覧会出品目録』（1933年）

■春の青龍展の目的

龍子は自らに課した三つの責任として「春の青龍展」「個展」「秋の本展覧会」を挙げている。

そして、「およそ作家を志す者が一年間を絶えざる鍛錬と努力とで過ごすことは、至極あたりまへのこと」と述べ、弟子も自分も画道に対して厳しい姿勢でのぞむためにこの展覧会をはじめたことがわかる。 『春の青龍展』の在り方『昭和二十七年春の青龍社展覧会出品目次』

それとともに、「若い活きのいゝ仕事をできるだけ多くの世衆に観て貰ふ——貰ひたい目的」と述べていることから、親心をもって若手画家にチャンスを与える意味合いをもった展覧会であったと言える。 『春の青龍展』に就て『第九回展覧会出品目次』（1941年）

2. 戦時下の「春の青龍展」の特色

■第二十回をむかえての回想から（『昭和二十七年度春の青龍社展覧会出品目次』（1952年））

「太平洋戦争が最悪の段階に上つた昭和二十年の春、あらゆる美術団体がその機能の停止を余儀なくされた時でさへ、青龍社は数々の困難を排除して敢行した。（中略）『展示』といふ行動を通じて、教養深い社会大衆への奉仕に依つて、聊かでも社会的寄与を果たさうとするものである。」

■第十三回春の青龍展（1945年6月7日～11日）

- ・各美術展が中止される状況で開催、会場は龍子と弟子の画室を利用した
→芸術を絶やしてはいけないという龍子の熱意
- ・戦中の物資が乏しい中、絢爛な《八ツ橋》を出品し、美術によって希望を持たせようとした
「空襲下の絵画の効用のいみじさを初めて知つて欣ばれたことは、われわれにとつても大きな感激であつた」『昭和二十七年度春の青龍社展覧会出品目次』（1952年）

■第十四回春の青龍展（1946年4月19日～29日）

同展開催の案内状には「御時世は花より團子といふ、鑑賞さるゝ御余裕のありや無しや」とある。
→戦後もどのような状況になろうと、龍子は美術を通して、社会に寄与しようとした。

3. 戦後の「春の青龍展」の取り組み

■1966年5月、最後の「春の青龍展」

第三十四回は龍子の姿なき「春の青龍展」であつた。5月14日に青龍社解散式が行われ、翌日、春の青龍展の会期終了とともに、青龍社の歴史が幕を閉じた。

（解散時の構成員は、社人21名、社友17名、社子43名）



青龍社の解散は「きつぱり云ふと青龍展なる固有名詞は龍子が墓の中へ持つて行く」（『第三十五回青龍展出品目録』（1963年））という生前の龍子の意志による。

■試作展は日本各地を巡回する人気の展覧会に

「青龍社の年間行事の第一陣、『春の青龍展』と漸くに開幕の段取りとなつたが、大阪、京都、神戸、名古屋と巡廻展を続けて、先は上半期を六月中旬に終了といふことになる。（中略）どうも途中で「初夏の青龍展」とも唱ひ得ないのには困つてゐる。」 『昭和三十年度春の青龍社展覧会出品目次』

◎春の青龍展の魅力

- ・会場関係から、大きさが六尺までという制限があつた。※唯一の例外は、1945年の展示。
- ・実験的なものや装飾的効果の高い作品が多く発表された。



秋の展覧会の豪快で大きな作品のイメージとは逆に、春の青龍展では親しみやすい作品や装飾的で格調の高い作品が発表され、大きな注目を集める展覧会として成長していった。

【ご案内】今年度の記念館講座 申込受付中（詳細は記念館講座チラシをご覧ください）

第2回：平成29年1月21日（土） 「尾崎士郎と大相撲」

第3回：平成29年2月18日（土） 「熊谷恒子・散らし書きの妙」

第4回：平成29年3月18日（土） 「知られざる蘇峰の日常」